

自主活動紹介
インタビュー

長浜まちづくり研究会

京都大学公共政策大学院十四期生 佐藤 慶一朗さん(代表)

白石 航さん

観光協会インバウンド部会 山本 享平さん

質問者・齋藤瑞生

取材日時・2020年9月14日長浜市内にて

(以下敬称略)

・長浜まちづくり研究会について

齋藤..長浜まちづくり研究会はどのような目的を持って活動しているのですか。

佐藤..根本的なコンセプトとしては、町おこしを現場で体験するということが一番にあります。

滋賀県の長浜市を舞台に、観光やまちづくりに携わっている現場の方々と意見を交わしつつ、フィードバックしていくということを目的として活動しています。

齋藤..主に長浜のどのような団体と協力して活動していますか。

佐藤..長浜まちづくり役場さんという黒壁⁽¹⁾の設立当時から商店街のまちおこしに携わっている方々と交流をさせていただいています。また去年からご縁があつて長浜の観光協会さんとも一緒に活動しています。

齋藤..お二人はなぜ長浜まちづくり研究会に興味を持ち、入会されたのですか。

佐藤..もともとまちおこしや地域というテーマに興味がある中で、単純に大学院の授業をとっているだけでは現地に向く機会が少ないので、もっと現場に足を運んで深堀

していききたいという考えのもとで入会しました。

白石..他の自主活動とは違ってまず何をやるのかというところから決めていく自主活動であるところです。この研究会はどういった政策分野をやるのか、どうやって形にしていくのか、どういったかかわり方をしていくのか、といったところから考えていくのが魅力で入会しました。

・現地での活動

齋藤..自分たちの代で新たに組みまれた試みは何かありますか。

佐藤..色々と現地で関わる方の幅を広げるこ

(1) 黒壁スクエア。長浜市内にある観光施設。

とができました。今まではまちづくり役場さんの人脈でヒアリングをしたり高校生と一緒に活動したりといった活動が多かったのですが、それを観光協会さんや他にも若手のまちおこしに携わっている方々といった幅広い方々と意見交換することによって、長浜というまちをより多角的な様々な視点から捉えることができたのは一つ大きな収穫だったと思っています。

齋藤・次に山本さんにお伺いしますが、長浜まちづくり研究会の活動を最初になぜ受け入れようと思ったのですか。

山本・嫌な言い方をすると、受け入れたかったわけではなく、偶然です。面白そうなので絡んでみたという事で大層に考えているわけではなく、こちらとしても刺激が欲しかったし、先に進めない部分もあったので、一回話してみると違った視点とか考え方も出せるかなと思ってそこから絡ませていただくようになりました。

普通に観光に携わっている人の目線ではなく、学生だからできる発想とかルールを取っ払って柔軟に提案してもらおうことを期待しています。それが実現可能かどうか

は携わっている人が考えればいい話なので、我々ができないような、考えつかないようなことをご提案いただきたいと思っています。

齋藤・学生ならではの視点と観光協会の視点、あるいは市民の方の視点は違うと思うのですが、例えば学生に両者のつなぎ役としての役割を期待することはありますか。

山本・つなぎ役としての役割はまったく求めていません。それよりも破壊者みたいな。使い古された言い方ですが、「馬鹿者よそ者若者」っていうじゃないですか。変な話、地方って若者は足りていなくて、東京よりも田舎の方が均質性をもった社会です。地元の方の発想となってしまうとなかなか面白いことは考えられなくて、そういったことの全部の裏返し「馬鹿者よそ者若者」なので、それを全部兼ね備えているのが大學生だと思っています。

どうしても僕らくらいの年齢になると今の若い奴らはといたくなるのですが、常識とかにとらわれない発想で提案してもらいたいんです。ルールとか常識とか予算とかに則ってやっていくことは、落とし込むと

きに必要かなとは思いますが。

齋藤・今度は学生の方に伺いたいのですが、いま破壊してほしいというご発言ありましたが、長浜のまちを見る中で自分たちだからこそ変えられるのではないかという課題は何か考えられたりしていますか。

白石・活動の中で、曳山祭り^②を運営されている方々のお話をうかがったときに、祭りを存続させていくために伝統を守りつつも、そこに対して風穴をあけていく、無茶なことも言っていくということは現地の行政の方々よりも部外者である僕たちの方がやりやすいと思いました。そういった意味でよそ者として提案していくことが課題だと思います。

齋藤・山本さんが去年から協力していく中で、この考え方は自分たちになかったとか、何か新しい視点を得られたという場面はありましたか。

山本・長浜まちづくり研究会の学生は真面目で、結構無難な答えが返ってくる事が多

(2) 例年4月に開催される、市内の各地区「山」ごとに鉦「曳山」に装飾を加え、それを担いで練り歩く祭り。

いというのが第一印象です。ただ話していく中で、それを取っ払っていくと色んな可能性が見えてきたのでまだまだ一緒にやっていけるな、と思っています。

僕の大学時代は、担当教官が世界銀行の人で、「大学ってというのは知識を学ぶところじゃないから、知恵を学ぶところだから」と言うような、フィールドワークが好きな変わった人の下で過ごしました。そのあと大学を卒業して結局就活はうまくいかなかった、たまたま受かった外務省の大使館のアルバイトでクロアチアへ行きました。その流れで結局転々とした自分の人生を振り返ってみると、長浜に住んではいるけど長浜らしくない長浜の人なんです。そこからすると、最初僕らよりも長浜の人だと思えました。もっと固定観念を取っ払っているんな提案をしてほしいと思っています。

いま観光庁さんとお付き合いがあつて話していると、観光という枠から抜け出せないというのが今の日本の観光の限界と感じているそうです。そこから抜け出すためには生活とか習慣を売っていく必要があるという話を聞いて、何年か前に出会った観光

庁の課長さんが言っていた「観光の最終形態は移住ですよ」という言葉を思い返して感銘を受けました。そういった着地点で話してもらえると一緒にやりやすいと思います。

・今後の活動の展望について

齋藤..それでは最後に、これからの長浜まちづくり研究会の展望をお聞きしたいです。

佐藤..個人の活動の展望としては、純粹で素直な視点を大事にしていきたいです。公共政策大学院の勉強だけでは現実的で悪く言えば無味乾燥な議論に終始しがちという部分があるので、純粹な素直な視点というのは問題意識としては非常に大事なことだと思います。そして、何より観光というのは人の心を動かすものではなくてはならないので、今一度自分の原点に立ち返って活動していきたいです。

白石..山本さんの話にあったような馬鹿者視点を踏まえて、自分たちに何が求められているのかをもう一度考え直してみたいです。また、施策の提案としてインバウンドの増

加を前提に考えていて、どうしても王道の観光資源トラディショナルなところに行きがちでした。それを、コロナを受けて国内の方に方向転換しなくてはならないので、そうした面で面白いユニークな案を出していきたいと思っています。

